

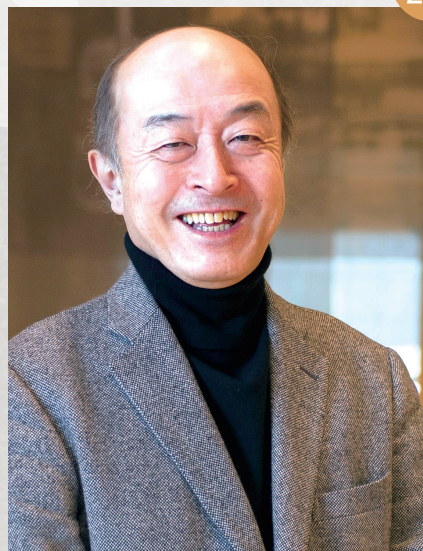
ゆうゆう

NO. 226

インタビュー

池辺晋一郎さん

(作曲家・東京音楽大学名誉教授)



©東京オペラシティ文化財団 撮影:武藤章

◆プロフィール◆

交響曲やオペラなどのクラシックにとどまらず、演劇、映画、テレビドラマやアニメなど多彩な音楽を生み出してきた池辺晋一郎さん。エッセーの連載、音楽番組の司会や講演などで音楽の魅力を伝える人でもあります。八〇年代のはじめには芥川也寸志さん、いずみたくさんたちと「反核・日本の音楽家たち」を立ち上げるなど、音楽を通じて、平和や人権：人間にとって大切なことを忘れないための活動も重ねてきました。その分厚い音楽人生の源は？ どうやって音楽が生まれるの？ など、お話を聞きました。

一九四三年水戸市生まれ。一九七一年東京藝術大学大学院修了。日本音楽コンクール、尾高賞などのほか映画、テレビ等の附帯音楽分野での受賞も多数。紫綬褒章、文化功労者、旭日中綬章受章。これまで交響曲十一曲、オペラ十一作を生み、演劇音楽約五百本、映画「影武者」「檀山節考」「うなぎ」など、テレビ「滞つくし」「独眼竜政宗」「未来少年コナン」などの音楽を担当。現在東京オペラシティ、石川県立音楽堂、姫路市文化国際交流財団などの音楽監督を務める。『空を見ますか』『モーツァルトの音符たち』など著書多数。

ピアノでデタラメ弾きを

楽しんだ幼少期

今年八十二歳。作曲家生活は六十余年になりますでしょうか。

池辺 八十二歳になるなんてことは予想もしていなかった。僕は子どもの頃から体が弱くてね。往診に来てくれていた医者が母親に、「このお子さん、二十歳まではとても無理ですから、そのつもりで育ててください」と話をしているのを聞いてちゃった。学校も一年遅れで入学したんです。

どんなお子さんだったのですか。

池辺 字を読むのが好きで、シェイクスピア、ドストエフスキー、夏目漱石、森鷗外：本棚にあるさまざまな全集を、わかりもしないのに片っ端から読んでいました。評論家の立花隆さんとは母親同士の仲がよく、幼なじみ。両方の家为本だらけだったので、行き来して互いの家の本まで全部読んでいました。ゲーテの『若きウェルテルの悩み』を読んだときは父親に、「若すぎるウェルテル」と言われ

たのおぼえています(笑)。

音楽にふれあった最初は？

池辺 家に、母が弾いていた香港製のピアノがありました。戦禍をくぐりぬけた古いピアノ。これは僕の最高の玩具で、デタラメ弾きを楽しんでいました。

家人のいないときには、「これからピアノの曲をお送りします。『怪獣のような雲』という曲です」などと自分で司会をしたりしながら。長じて演劇の音楽を五百本以上書くようになるとは、思いもありませんでした。なかでもシェイクスピアは多く、「ハムレット」は文学座、俳優座、無名塾などで六回も書くことになるなんてね。

ご両親はどんな方でしたか。

池辺 両親とも音楽好き。母はピアノをやっていたし、父も学生時代は新響(新交響楽団。今のNHK交響楽団)の会員だったらしい。中一で水戸から東京に引っ越してきて成績が一番になり、ほめてもらいたくて父に報告すると、「一番は上がないからダメだ。二番くらいでいつも上を目指すことを忘



「民族楽器を借りて我が家を訪れた黒澤監督と池辺、妻」。映画「夢」制作中の1989年

れるな」と、全然ほめてくれない。そのとき僕は、「大吉より中吉が幸せ」というのと同じ論理だと思ったのを、今でもおぼえています。

入学したときは僕だけ外様で、借りてきた猫みたいに大人しくしていたのが、二年になって爆発的にいたずらっ子のガキ大将に。担任のことをからかった校歌の替え歌を教室の黒板に書いたら、学校から親に呼び出しがかかった。母親は一言、「自分のことをからかわれて怒るような先生はたいしたことない。気にしなくていいよ」と(笑)。

正当なご両親ですね。やんちゃに大転換したきっかけは？

池辺 ピアノなんですよね。中学校に新しく講堂兼体育館ができて、ピアノ開きのために来た有名なピアノリストの前座でシュューベルトの即興曲を弾いて、「なんだ、あいつは!」となった。これに反発していたずらっ子になったみたいです。ピアノは小学生になって体が丈夫になってから習い始めたんですが、次々新しい曲を弾くのが好きで、開いたページを初見で弾くから先生は困ったみたい。でも、指使いなどはお構いなしだから怒られる。そうすると嫌になっちゃう。だから練習するのは大嫌いでした。

中高は部活で音楽を？

池辺 中学は吹奏楽部でクラリネットを吹いていました。都立新宿高校に進むと合唱部しかなかったので、試験を受けて朝日ジュニア・オーケストラに入りました。周りには上手い人ばかり。上手なヤツばかりの中で小さく丸まっているより、下手な仲間のリーダーになるほうがまし。午後よりも鶏口を選

んで、「鶏口牛後」と大書して家の勉強机の前に貼り、高校にオーケストラ部をつくりました。

クラリネットは上手いのにかかせて、集まった人間の編成に合わせて、モーツァルトやハイドンの曲を編曲して指揮をするように。ヴァイオリンが二人、トランペットが五人、ウクレレが四人来たりしてね。ウクレレ入りのモーツァルトなんてハワイに行ってもないと思うよ(笑)。

自由な校風の都立新宿高校が合っていたんですね。

池辺 僕の人生のポイントは二つあって、一つは小学校浪人。もう一つは高校だと思っています。新宿高校は、それぞれ得意があって個性的で多様な環境。音楽好きも多かった。シュューベルトの「冬の旅」を全曲ドイツ語で歌える工藤君と、ジュゼッペ・ディ・ステファアーノという有名なテノール歌手をもじってジュゼッペ・ディ・セキバーノと名乗る、カンツォーネ好きの関場君からは、ピアノ伴奏を頼まれました。音楽専門の学校に行っていたら、音楽好きに

なったかな…。牛後に慣れてしまったんじゃないかな。

映画もよく観ました。学校から二分のところに日活名画座があり、二限目をさぼって観て、翌日三限目をさぼって続きを観た。名画だというからとにかく全部観た。黒澤明監督の「椿三十郎」は、「元旦くらい家にいる」という父親の怒鳴り声を尻目に、封切り日の元旦に友達と観に行った。この話、「影武者」などでご一緒した黒澤明監督と最初に仕事をしたときにしたら、「エー！あの頃中学生？君の年齢、僕の半分だぞ」と。監督は当時七十歳でした。篠田正浩、今村昌平といった監督とも一緒に、僕の世代では観ていないはずの映画を観ていたから会話ができた。まさかそういうふうに関に立つなんて思いもよらずに、日活名画座に通ったんですね。

思いもよらず、好きなことがお仕事に生かされていったんですね。作曲の勉強はいつから？

池辺 高一の春休みに祖父父母の所に遊びに行って、デタラメに書いた楽譜を置いて出かけたら、祖父

か祖母がそれを風呂敷に包んで東京藝大の作曲科の学生のところを持って行っちゃったんです。その人が「こんなデタラメをやっているで、キチンと勉強してごらん」と、その場で東京藝大の池内友次郎教授に電話。池内先生のお弟子さんについて作曲の勉強をするようになります。

あの時の、視界がパーツと開ける感覚を今でも鮮烈におぼえています。それまでデタラメに書いていたのが、その背景にある理屈がわかってしまったんだから面白くしょうがない。好きな詩で合唱曲を書く課題なんかはうれしくて、片っ端から合唱曲にしていきました。立原道造、中原中也、北原白秋、島崎藤村：僕は詩が大好きでずっと読んでいて、大学時代には同人誌にも入っていたほど。のちに合唱曲もたくさん書きましたけど、その頃にはもう、合唱曲集をつくるつもりでいたんです(笑)。

演劇も好きだった？

池辺 演劇も好きで、子どもの頃は学芸会で主役をやったくらい。高校時代は会員制の演劇鑑賞組織に

入って新劇をよく観ていましたし、東京藝大での部活は演劇部です。

最初に劇団と音楽でかかわったのは俳優座。藝大の演劇部なら芝居好きでピアノが弾けるヤツがいるだろうと声がかかって、俳優が歌う歌のピアノ伴奏を舞台袖でするアルバイトを。作曲の仕事をするようになってからは、杉村春子さんとは文学座の旅回り公演も訪中文化代表団も一緒にするほど近しくなり、仲代達矢さんの無名塾の音楽は初期から今までずっと書いています。

演劇、映画、文学：好きなことからアプローチすると、演劇人や映画人が、あいつはこの仕事が好きだと思ってくれて、一緒に仕事をしたいということになるんじゃないかな。

大河ドラマ一本で

作る曲は六百五十!!

池辺さんの作曲の師は？

池辺 池内友次郎、矢代秋雄、三善晃の三人は、音楽に対する考え方においてすごく大きな存在。作

曲するうえで刺激を受けたのは二人。一人は、二十代後半から十年ぐらいアシスタントをしていた武満徹さん。武満さんは単なる音楽家じゃない。詩人にも映画監督にもなりえた人。武満さんの言葉で僕が好きなのは、「何ほどのこともなく作曲していたい」。あくまでも自然体で、あれだけの仕事が生まれる。武満さんの自然体のひとかけらでも、と思いつけています。

もう一人は松村禎三さん。大学を終わる頃、好きなように作曲したものがコンクールで一位になったり評価されていた時代に、「君は何のためにこの曲を書くのか」と問われ、「君は作曲坊やだ」と言われた。シヨックで二年間ぐらい自分の作品が書けなくなっていました。その間にNHKや俳優座、文学座から仕事が来るようになって、それは作曲できるんですよ。でも自分の作品は何を書いているかわからないというジレンマの時代。大きな先輩がいたから、僕はこうして生きてきたといえます。

発想が曲になるプロセスは？

池辺 映画や演劇のようにテキスト

トがあるものは、それに即して発想が醸造されます。同じ素材を何度も書くときでも、毎回違う演出に合わせようとすると音楽も変わらざるを得ません。オペラも、ただ言葉に音楽を乗せていくだけではなくて心理的なものが入るし、古式豊かにか、現代風にか、演出によってまったく変わってきます。

大河ドラマは一九七八年の「黄金の日」、一九八七年の「独眼竜政宗」など五つを担当。ドラマチックな曲調が今も心に残っています。朝ドラ(連続テレビ小説)「君の名は」は、確か一年間の放映でしたね。一つの作品でどれくらい曲を書くものなのですか。

池辺 大河ドラマは一年で六百五十曲、「君の名は」は、積み重なった楽譜を整理したら千十曲ありました。ドラマは、撮影・編集が終わるとビデオテープが家に届きます。それを観ておいて、大河ドラマの場合は当時、金曜日の夜にどのシーンのどこへ音楽を入れるかをNHKで打ち合わせ。M-1は四十二秒、M-2は二分十八秒な

「悪魔の飽食」をうたう東京合唱団 創立30周年記念
戦後80年 加害の歴史を忘れない
つなごう！ 平和のバトン
コンサート

スペシャルトーク
池辺晋一郎 & 榎ふみ
大合唱
混声合唱団「悪魔の飽食」

指揮 池辺晋一郎
（東京交響楽団音楽監督）
榎ふみ（俳優）

2025年
11月29日（土）
14:00開演（13:15開場）

練馬文化センター 大ホール
（西武池袋線 練馬駅中央北口下車 徒歩3分）
入場料（全席自由）：2000円、当日2500円／
障がい者・学生1000円／介助者・高校生以下無料

主催 混声合唱団「悪魔の飽食」をうたう東京合唱団
チケット連絡先 平田 090-7178-0571 / 小倉 090-4438-8637

コロナ禍で中断していた「悪魔の飽食」を歌うコンサートは11月29日、東京から再開。1996年から13年間、NHKのクラシック番組「N響アワー」で池辺さんと一緒に司会を務めた榎ふみさんとのスペシャルトークも。

【今後のコンサート情報】
トキョーコンサート・ラボにて2026年2月5日（木）「池辺晋一郎大全集 vol.8 池辺晋一郎の合唱II」池辺晋一郎（解説・トーク・指揮）、水戸博之（指揮）、東京混声合唱団。「円形の天地…京都から」「この世界のぜんぶ」「わたしの手を組みしめよ」他

【問い合わせ】
東京コンサート
TEL 03-3200-9755



執筆の仕事も多く、現在も7本のエッセーの連載を持つ池辺さん。1993年から「うたごえ新聞」（週刊）に連載したエッセーをまとめた『空を見えていますか…』（新日本出版社）はこれまで14巻を発行。軽妙なタッチでとても楽しいエッセーです！「書きたいことはたくさん。3回分くらい書き溜めてあるくらい」

どシーンごとに計時し、作曲。書き上がったらパート譜を作成するために写譜屋さんに渡し、水曜日の夜に録音というスケジュールでした。

四十代の頃、僕の仕事部屋にはデスクが五つ並んでいました。合唱曲、映画、演劇、テレビドラマ、それに写譜屋さん用の机という具合。やりかけのものは机に出っっぱなし、五線譜も置きっぱなしにしておいて、グルグルと机を回って同時進行しながら、スタジオや

放送局を一日に三か所くらい回る。月に何度かの徹夜は当たり前。その間に自分の作品を書く。すさまじい日々でした。

仕事のモチベーションはどうやって？
池辺 大きく分けて演劇や映画、テレビドラマなど劇の伴奏「劇伴音楽」の仕事と、自分の作品「純音楽」があるんですね。他者と交じり合うか孤独に作るかが両者の違い。一人でつくっていると誰

かと一緒に仕事をしたくなるし、一緒に仕事をしていると一人で自分の曲を書きたくなる。僕はどちらかに偏るとダメになるタイプなので、この二つを行ったり来たりしながらここまで来たとおもいます。

合唱には大勢の人の心を一つにする力がある

反戦、反核、人権、環境、災害被害者へのメッセージ、復興支援など、社会的なメッセージ性を持った合唱曲も多く書いてこられました。特に森村誠一さんのベストセラー『悪魔の飽食』をもとに、森村さんが書いた詞を七楽章にまとめた混声合唱組曲「悪魔の飽食」は初演から四十年以上、全国横断コンサートが続け、中国公演も三回。どんな思いがありますか。

池辺 合唱という演奏形態には、大勢の人の心を一つにし、互いの肩を組ませる魔力のようなものがあるようです。特に「悪魔の飽食」は「皆で力を合わせよう」という未来志向の楽章が最後にくる。歌い

手はそこである種の使命感とか達成感を感じるようで、全国に何百人と歌う仲間が増え、同窓会のようにつながりあっています。

歌詞のある曲だけではなく、交響曲や室内楽など言葉のない曲を書くときも、音楽的な方法でつくり手の思いを込めることでは同じです。演奏しても人権問題が解決されたり平和にはならないけれど、解決の支えや平和を目指そうというときの力にはなる。聴いた人は問題を知り、関心を抱く。それが音楽だと僕は思います。

これからの予定は？

池辺 音楽監督をしている東京オペラシティコンサートホールでの八十歳のバースデーコンサートで、これまで数多の曲を委嘱で書いてきたので、これからはゼロから書きたいと言ったら、山のように依頼が来てしまった。選びに選んだ六作品の初演がまもなく終わるので、いよいよ「交響曲第十二番」を仕上げたい。頼まれてもいないのに、書きあがった晩には、「これやってよ」と言っておかしい相手のことまで構想しています（笑）。